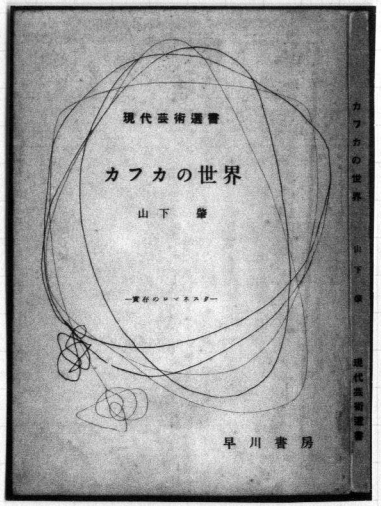
山下肇（やましたはじめ）　ドイツ文學者、評論家。大正九年五月一日東京生れ（一九二〇―）。昭和十七年東京帝國大學文學部獨文科卒。陸軍に入り飛行科見習士官となる。復員後浦和高等學校教授、四十三年東大教授、のち聖心女學院教授。この間の二十四年共著わだつみ會事務局長。

譯書に、ハイネ著『浪漫派―近代精神の系譜と文學の課題』（昭和二十一年十二月三十日夏目書店）、G・ヴァイゼンボルン著『炎と果實―メモリアル（ある青春と地下室の記錄）』（昭和二十九年五月十八日岩波書店「岩波現代叢書」）、R・M・リルケ作『聖なる春』（新裝・昭和三十年三月二十五日ダヴィッド社）、ヘルムリーン作『第一列』（昭和三十年五月二十日岩波書店「現代の文學」）、カナカ作『変身他一篇』（昭和三十三年一月七日岩波書店「岩波文庫」）、エッカーマン著『ゲーテとの対話』全三冊（上・昭和四十三年十一月十六日、中・十二月十六日、下・四十四年三月十七日岩波書店「岩波文庫」）等。著書『カナカの世界―實存のロマネスク』（昭和二十八年八月十日、再刊・二十九年八月十五日早川書房「現代芸術選書」）、『ドイツ抵抗文學』（佐藤晃一共著、昭和二十九年十一月二十日東京大學出版會「東大3・6版」）、『私の卒業論文』（共著・東京大学学生新聞会編、昭和三十一年十二月十五日同文館）、『詩人の運命』（昭和三十二年四月五日書肆パトリア）、『誰ぞ物言わざるべからぬ』（昭和三十五年一月二十五日室町ペブリシティー）、『学生はどこへいくー大学と大学生』（昭和三十

六年八月十五日文藝春秋新社）等。